様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：８４４１９
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１２８７６

研究課題名（和文）安徽地方の絵画研究－明清時代中国における地方様式の形成と発展－

研究課題名（英文）Research on the paintings of the Anhui regions in the Ming and Qing Dynasties

研究代表者
都甲　さやか（TOKO, Sayaka）

公益財団法人大和文華館・その他部局等・学芸部員

研究者番号：８０７０６７５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：明末清初（17世紀）に成立した地方の絵画様式のひとつ「安徽派」の形成と確立、発展について、①画風の選択意図、②人的交流、③郷里への顕彰意識という３つの観点を中心に、絵画作品と文献史料を精査することで考察した。結果、安徽の画家達は、醸成期（16世紀末）から、他の地方の画家達とも交流する中で、倣古学習や郷里への顕彰意識などをもとに、安徽ならではの絵画表現や画作における考えなどを見いだし、他とは異なる独自の絵画様式を作り上げようとした可能性が高いとわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
美術史における普遍的な課題の一つといえる、絵画を生み出す「場」の重要性について、16世紀末～17世紀中国の安徽地方を視座とする一事例を提示した。また本研究を進める上で、これまで注目されてこなかった、あるいは未発見であった絵画作品等の資料について、研究発表や論文、関連する展覧会の開催等によってその史的位置を適宜発表、共有した。以上の研究成果は、今後中国絵画史をはじめとする様々な分野の研究をより深めるための資になると考える。

研究成果の概要（英文）：This study discusses the formation, establishment, and development of the Anhui school, one of the local painting styles established in the late Ming and early Qing dynasties (17th century), through a close examination of paintings and archival materials. The examination focuses on three perspectives: (1) the intention behind the choice of painting style, (2) human interactions, and (3) the awareness of honoring one's homeland. The results indicate a high likelihood that Anhui painters absorbed a variety of painting styles and ideas on painting in the course of their active exchange with painters from other regions, and then, from the early stages of the formation of the Anhui school (late 16th century), set out to create a unique Anhui painting style that was different from others.

研究分野：中国絵画史

キーワード：美術史　東洋史　中国絵画史　明清絵画史　文人画　安徽

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

申請者は、修士課程から継続的に、中国明代の文人絵画史について研究を行ってきた。中でも、16 世紀蘇州の文人・文徵明（1470～1559）とその師である沈周（1427～1509）が確立した絵画様式「呉派」の成立背景を主な考察の対象としてきたが、その研究成果をもとづきつつ、近年では更に明末清初（17 世紀）、呉派が文人画風の典範として各地に伝播し、それぞれの地でどのように受容されたかについて、考察の対象を広めるようになっていた。すなわち明末清初には、江南の各都市を中心に、呉派の画風を下敷きとした個性ある画派が複数成立したが、その中でも安徽地方は、他と比べて独自性が顕著な、水墨を基調とした枯淡な絵画様式を確立したことで知られてきた。申請者は、そうした安徽派の特異性への関心の他、関連作品が比較的多く現存していること、過去から現在に至るまで、学術論文や展覧会などの多角的な研究蓄積があること等から、安徽派を集中的に研究することで、呉派以降の中国文人画様式の形成と確立、そして発展の一様相を明らかにしたいと考えた。そこで令和 2 年（2020）に安徽派の特別展「墨の天地―中国　安徽地方の美術―」（2020 年 10 月 10 日～11 月 15 日、於大和文華館）の開催を企画し、それに関連する絵画作品や文字史料の調査収集及び研究をおこなった。

「安徽派」に焦点をあてた初の展覧会は、1981 年の“Shadows of Mt. Huang: Chinese painting and printing of the Anhui School”（於アメリカ：カリフォルニア・バークレー美術館）であり、この展覧会を嚆矢として、画家や作品など、安徽派の実相が広く知られることとなった。以後は、地方の一画派としての概説的紹介、関連する画家の個別作品に関する論考等が国内外でたびたび発表されてきたが、そうした個々の論考を有機的に結び付けるような総合研究および大規模な展覧会は、1981 年以降は特に行われていなかった。申請者はまず 2020 年開催予定の展覧会において、現在までの研究蓄積を束ね、新出作品を含めた安徽派の関連作品を紹介することで、安徽派ひいては同時期に成立した諸画派など、中国絵画史の展開についての今後の研究の推進に役立てるとともに、研究成果の一部を公開する機会にしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、16 世紀末に安徽地方で確立した絵画様式「安徽派」について、これまでの研究動向を整理しつつ、新たに絵画作品と文字史料の収集・精査を通して、その形成と発展を明らかにすることにある。それによって、近年国内外で注目されている明清時代中国絵画の地方様式の実相について、新たな事例と問題点を提起することで、更なる議論の深化を促したい。なお成果は適宜、展覧会・学会発表・研究論文といった形で公開することで、国内外における中国絵画史をはじめとする諸研究分野に資することをめざす。課題の遂行にあたっては、主に以下の 3 つのテーマを設定し、考察を進める。

（1）　画風の選択意図

明末以降、16 世紀末に蘇州で確立した呉派様式が、各地域に伝播・受容したことで、独

自の地方様式がそれぞれの地で醸成された。中でも安徽派は、他地域とは違って呉派の色彩表現を自分達の様式にはあまり取り入れず、乾潤、濃淡などを最大限に活かした墨の表現を主とした。これは、17 世紀当時の資料や現在までの研究から、元末（14 世紀中期）の文人画家である倪瓚の、水墨を基調とした枯淡な絵画表現を積極的に取り入れたためであると指摘されてきたが、なぜ安徽ではとみに倪瓚が受容されたのか、またそれ以外の要因については、深く考察されてこなかった。本研究では、実作品の調査および資料の網羅的収集を通し、この問題について更なる見解を提示する。

（2）　人的交流

安徽派は、少なからずの者が揚州、南京などに活動の拠点を移したが、彼等の多くは土地を変えても現地の絵画様式に追従せず、郷里の様式を用いて画作を行った。その背景として、申請者は、地方様式そのものを自らのアイデンティティとみなし、更にその考えが、出身地を同じくする画家達の間で共有されたためと考える。また独自の様式を醸成していく過程では、明末（16 世紀後半）から他地域の画家達と交流し、その中でそれぞれの絵画様式や画作にあたっての考えに触れ、それらと共有・差異化をはかりながら、郷里ならではの絵画様式、制作理念を構築していったと推察する。こうした、安徽派の成立背景を考えるうえで重要な要素として、安徽の画家達の人的交流の実相を、関連する作品文字史料から考察し、安徽地方コミュニティの実態を探る。

（3）　郷里への顕彰意識

絵画表現や制作動機に、郷里への顕彰意識が強く働いた可能性を考察する。例えば、安徽の代表的な名勝であり、明末以降に安徽派を代表する画題の一つになる黄山図が、郷里を離れた文人や商人達のあいだで、郷里への思慕を共有するモチーフとして機能した可能性、また古来からの墨の名産地であることが、墨の効果を最大限に活かす絵画表現へと向かったことを、文献史料や絵画作品を通して考察する。

3. 研究の方法

（1）　考察対象

安徽派に属する画家の作品、それ以外にも、申請者が考察をすすめる中で、画派の形成・発展を考える上で重要とみなした画家とその作品を主な考察対象とした。なお、どの画家を安徽派とみなすかについては、先学の研究における判断を参考に（主要参考文献：James Cahill 他, *Shadows of Mt.Huang: Chinese painting and printing of the Anhui School*, University of California, Berkeley. University Art Museum, 1981。『中国歴代絵画流派大系新安画派』浙江人民美術出版社、2018 年。）しつつ、経歴や画風などから、申請者が安徽派に属しうると考える画家を新たに加えた。考察対象の時期としては、安徽派の醸成期にあたる明中～後期（16 世紀）から確立期（17 世紀）までを中心とし、更に以後、安徽派のエッセンスがどのように継承されていくかを考えるために、清時代（18 世紀）～中華民国時代（20 世紀）までの作品及び文字史料も考察対象とした。

また、4 年間の成果をより実のあるものにするには、全ての画家を広く浅く俯瞰するので

はなく、考察の軸とする画家を数名に絞り、その画家の作品と関連資料を集中して精査する必要があると考えた。したがって、絵画作品等の関連資料が比較的多く現存する画家の中から、醸成期研究：李流芳（1575～1629）、確立期研究：査士標（1615～98）という、それぞれ軸となる画家を設定し、この 2 名については、特に集中的な資料収集および研究成果の整理に務めた。

（2）　作品調査

上記（1）に基づいて、主に日本国内に所蔵される関連作品（書画・漢籍など）の実見調査及び、研究資料としての写真撮影を行った。調査した作品で特に重要と思われるものは、展覧会（下記（4）参照）において借用陳列するとともに作品解説を掲示し、その史的重要性を公に提示すると共に、成果の共有、議論の発展をはかった。

（3）　文献調査

上記（1）に基づき、国内外の図書館、研究機関に所蔵される漢籍及び論文などの資料収集に務めた。文献によっては、書画作品と同様に展覧会（下記（4）参照）において借用陳列し、その史的重要性を公に提示した。

（4）　研究成果の公表（展覧会の開催、論文、学会発表）

本課題では、研究を進める中で得た新たな知見や、新たに見いだされた作品などを、展覧会において適宜展示し、図録を作成することで、公に情報を共有し、議論の深化を促すことをこころがけた。主な展覧会としては、「特別展　墨の天地―中国安徽地方の美術―」（2020 年 10 月 10 日～11 月 15 日）、「特別企画展　東アジア文人の肖像―書画と文房具―（2022 年 2 月 18 日～4 月 3 日）、「特別企画展　明清の美―15～20 世紀中国の美術―」（2022 年 11 月 18 日～12 月 25 日）（以上、いずれも開催地は大和文華館）があげられる。これらの展覧会で更に得られた知見は、論文や学会発表という形で公表した。

4. 研究成果

2020 年の特別展「墨の天地―中国　安徽地方の美術―」展（2020 年 10 月 10 日～11 月 15 日、於大和文華館）では、初公開作品を含む安徽派の絵画・文献・工芸資料を、「画派の形成・確立・発展」と「郷里への顕彰意識」というテーマのもとに展示し、その成果をとりまとめた図録も作成した。本展は会期が新型コロナウィルス禍中であったため、渡航できなかった海外の研究者へは、図録を送付することで情報を共有した。2021 年度以降は、本展を通して得た知見、研究者達からの意見等にもとづきつつ、研究課題を遂行する上で重要とみなされる画家を 2 名、中心的な考察対象として設定し、その画家にまつわる作品や文字史料などを、本課題で設定したテーマ（【２．研究の目的】参照）を意識しつつ調査研究を行い、安徽派全体の実相を探っていくための手がかりとした。

①安徽派醸成期の画家―李流芳（1575～1629）をめぐる研究成果

明末の安徽派醸成期の画家が、どのような絵画表現を理想とし、また画作にあたってどのような意識を持っていたかをさぐるため、関連する絵画作品（例：李流芳「江山楼閣図巻」

澄懐堂美術館蔵など）の実見調査、文字史料の収集精読（例：李流芳撰『檀園集』など）をおこなった。結果、李流芳は画作において倣古をきわめて重視しており、元の倪瓚や明の沈周・文徵明等、過去の文人画家への敬意を強く抱きつつ、その画風を自身の作品に取り込みながら自己様式を確立していったことがわかった。更に、李流芳は祖籍が安徽であり、出生地は嘉定（今の上海市嘉定区）だが、嘉定付近で流行した彩色を多く用いる絵画様式（松江派）にはあまり添わず、墨の濃淡と乾潤、墨を面的に塗布することで諧調の変化を表すなど、墨の効果を最大限に活かす山水表現に向かった。その傾向は、同じ安徽出身で嘉定に居した友人・程嘉燧（1565～1643）の山水画にも同様に認められることから、両者は安徽出身であることを強く意識し、別の地域における自らのアイデンティティの表明の手段として、画風を共有しあっていた可能性が高いことを指摘した。更に絵画表現における墨への傾倒は、安徽が古くから墨の名産地であり、同時代にも高い名声を誇っていたことから、これも郷里への顕彰意識に由来するものであると考えた。

以上の研究で明らかになった、李流芳の絵画表現や制作態度は、後に確立する安徽派様式の成立背景や、画作の根底にある意識を考えるうえで非常に重要なものといえる。

②安徽確立期の画家―査士標（1615～98）をめぐる研究成果

査士標は、安徽を初めとする各地方の絵画様式が確立・普及し、安徽派の画家達が最も盛んな芸術活動を行った清時代初期（17 世紀）に活躍した文人画家である。国内外にある査士標の関連作品の実見調査（例：査士標「倣黄公望山水図巻」重要美術品、東京国立博物館蔵。査士標「山水図冊」兵庫県立美術館（梅舒適コレクション）蔵など）および写真資料の収集、文字史料の収集精読（例：査士標撰『種書堂遺稿』など）を通して、絵画表現や人的交流、画作にあたっての考えなどをうかがった。査士標の絵画は、墨の効果的な使用という李流芳の時代から続く安徽派の特徴を明確に継承するが、色彩に対する強い関心もしばしばみられる。調査の結果、それは彼が、主な活動地である揚州において、王翬（1632～1717）や惲寿平（1633～90）といった他地域の画家達と盛んに交流し、絵画制作についても頻繁な意見交換や共同制作を行う過程で、明末から継承される安徽派の様式や絵画理念に、他派のそれを適宜取り込んでいくことで、自己様式を構築したためであると考えられた。

以上のことから、17 世紀の安徽派の画家が、地方様式に膠着せず、他派の様式や絵画理念にも眼を向ける中で、新しい絵画表現を創出しようとしていたという、その一様相を明らかにすることができた。

以上、安徽派の形成と発展に関わる一様相を明らかにしたことは、明清時代における地方画壇全体についての考察、ひいては東アジア美術史研究を更に推し進めるうえでの資になるものと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 都甲さやか	４．巻 145
２．論文標題 李流芳「江山楼閣図巻」（澄懐堂美術館蔵）について	５．発行年 2024年
３．雑誌名 大和文華	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 都甲さやか	４．巻 227
２．論文標題 富岡鉄斎「松花堂幽居図」（清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵）ー「松花堂所用牧谿墨」との関わりからー	５．発行年 2024年
３．雑誌名 美のたより	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 都甲さやか	４．巻 226
２．論文標題 富岡鉄斎「撥墨山水図」（清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵）―牧谿受容の一様相―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 美のたより	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 都甲さやか	４．巻 -
２．論文標題 富岡鉄斎と羅振玉の交流	５．発行年 2024年
３．雑誌名 特別企画展　没後100年　富岡鉄斎－知の巨人の足跡－ 展図録	６．最初と最後の頁 13-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 1539
2．論文標題 清・査士標画　山水図冊	5．発行年 2024年
3．雑誌名 國華	6．最初と最後の頁 39-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 222
2．論文標題 明末清初の博古図ー伝趙孟フ「故事人物図冊」（黒川古文化研究所蔵）をめぐって	5．発行年 2023年
3．雑誌名 美のたより	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 220
2．論文標題 戴熙筆「鴛湖春楷図巻」（清・道光27年【1847】、兵庫県立美術館蔵）をめぐって	5．発行年 2022年
3．雑誌名 美のたより	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 363
2．論文標題 明清之美ー大和文華館「15至20世紀的中国美術」特展	5．発行年 2022年
3．雑誌名 典蔵古美術	6．最初と最後の頁 92-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 都甲さやか	４．巻 217
２．論文標題 明清時代の文人肖像画－「石林浄香図」（個人蔵）をめぐって－	５．発行年 2022年
３．雑誌名 美のたより	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 都甲さやか	４．巻 1510
２．論文標題 清・程邃筆　山水図	５．発行年 2021年
３．雑誌名 國華	６．最初と最後の頁 40－42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 都甲さやか	４．巻 354
２．論文標題 勾勒文人輪郭ー大和文華館「東亜文人肖像ー書画与文房具」展	５．発行年 2022年
３．雑誌名 典蔵古美術	６．最初と最後の頁 74－77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 都甲さやか	４．巻 337
２．論文標題 日本珍蔵安徽派書画大集合　大和文華館「墨之天地ー中国安徽地区美術ー」特展	５．発行年 2020年
３．雑誌名 典蔵古美術	６．最初と最後の頁 82-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 －
2．論文標題 総説　墨の天地－中国　安徽地方の美術－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 特別展　特別展　墨の天地－中国　安徽地方の美術－　図録	6．最初と最後の頁 6-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 －
2．論文標題 作品解説	5．発行年 2020年
3．雑誌名 特別展　特別展　墨の天地－中国　安徽地方の美術－　図録	6．最初と最後の頁 122-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 212
2．論文標題 黄山の松－「擾龍松」を描く作品を中心に－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 美のたより	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 都甲さやか	4．巻 213
2．論文標題 清初の安徽地方の山水画－査士標「赤壁図」（個人蔵）を中心に－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 美のたより	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 都甲さやか
2．発表標題 清時代の倣古の一様相－査士標「倣黄公望富春山居図巻」（東京国立博物館蔵）についてー
3．学会等名 第76回美術史学会全国大会
4．発表年 2023年

1．発表者名 都甲さやか
2．発表標題 富岡鉄斎の中国憧憬
3．学会等名 大和文華館　日曜美術講座
4．発表年 2024年

1．発表者名 都甲さやか
2．発表標題 明清の山水画ー伝統と新風ー
3．学会等名 大和文華館　日曜美術講座
4．発表年 2022年

1．発表者名 都甲さやか
2．発表標題 中国の肖像表現にみる文人へのあこがれ
3．学会等名 大和文華館　日曜美術講座
4．発表年 2022年

１．発表者名 都甲さやか
２．発表標題 中国　安徽地方の美術の魅力
３．学会等名 大和文華館　日曜美術講座
４．発表年 2020年

〔図書〕　計4件

１．著者名 都甲さやか	４．発行年 2022年
２．出版社 天理時報社	５．総ページ数 32
３．書名 特別企画展　明清の美ー15～20世紀中国の美術ー展図録	

１．著者名 都甲さやか	４．発行年 2020年
２．出版社 天理時報社	５．総ページ数 176
３．書名 特別展　墨の天地ー中国　安徽地方の美術ー展図録	

１．著者名 都甲さやか	４．発行年 2024年
２．出版社 天理時報社	５．総ページ数 18
３．書名 特別企画展　没後100年　富岡鉄斎ー知の巨人の足跡ー展図録	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関